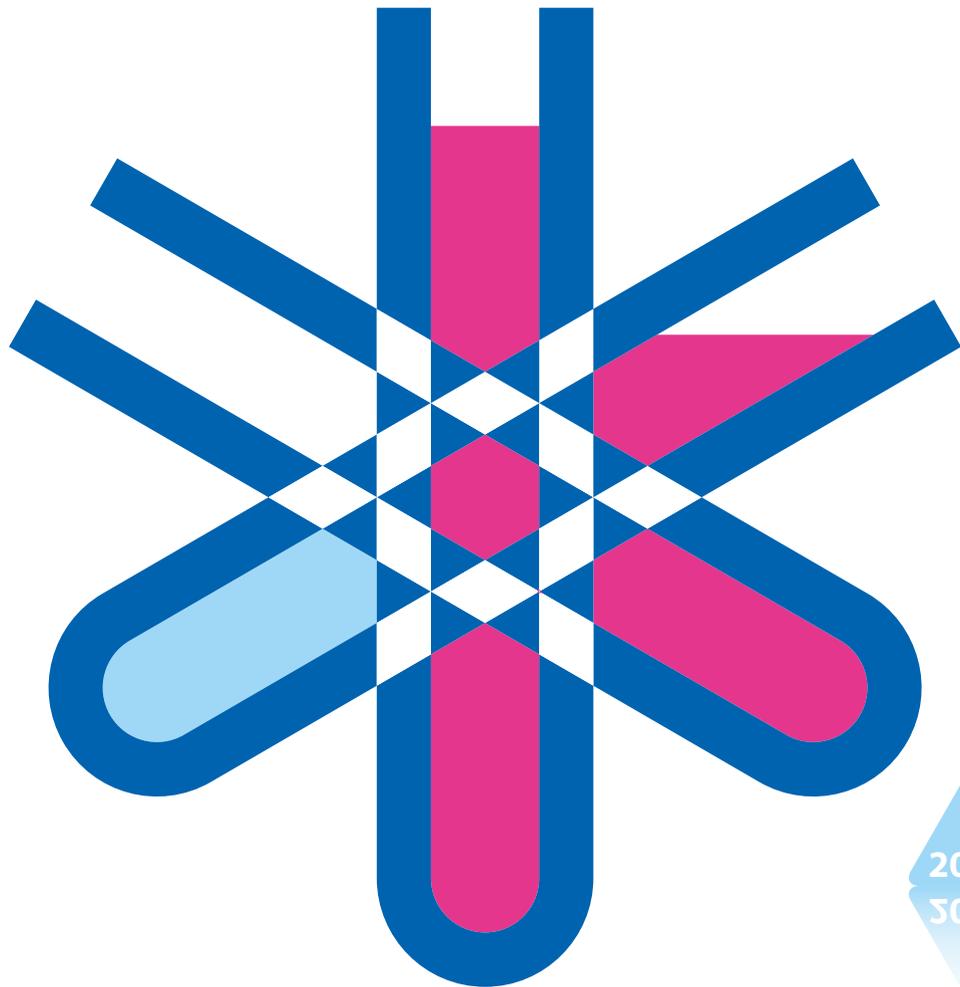


# 横查情報月報



横浜市衛生研究所

# 令和6年1月号 目次

## 【検査結果】

横浜市内のマダニ類調査結果（令和4年度） .....	1
横浜市内の蚊成虫生息状況調査結果（令和5年5月～10月） .....	4
魚介類中のPCB及びメチル水銀検査結果（令和5年度） .....	7
農産物の残留農薬検査結果（令和5年10月） .....	8

## 【情報提供】

衛生研究所ウェブページ情報（令和5年12月） .....	11
------------------------------	----

## 【感染症発生動向調査】

感染症発生動向調査報告*（令和5年12月） .....	12
-----------------------------	----

\* この記事では主に、医療機関向けの情報を提供しています。

感染症発生動向調査は感染症法に基づく国の事業です。本事業に関する詳細は、「感染症発生動向調査とは」（下記URL）をご参照ください。

<https://www.city.yokohama.lg.jp/kurashi/kenko-iryo/eiken/kansen-center/doko/systemgaiyo.html>

# 横浜市内のマダニ類調査結果（令和4年度）

## 1 はじめに

マダニ類は日本に約50種が生息しており、すべての種が吸血し、主に哺乳類や鳥類、爬虫類などに寄生します。ダニ媒介感染症は、病原体を保有するダニが吸血の際に病原体を媒介することによって起こる感染症のことです。マダニ類による吸血は、幼虫、若虫、成虫の各ステージで1回ずつ、生涯で3回行われ（図1）、いずれも病原体を媒介するリスクがあります。

ヒトの主なダニ媒介感染症は、急性重症熱性血小板減少症候群（severe fever with thrombocytopenia syndrome; SFTS\*<sup>1</sup>）、ウイルス脳炎、日本紅斑熱、ライム病などが挙げられ、特に近年ではSFTSが問題となっています。

SFTSは、日本国内で2013年（平成25年）1月に死亡例が初報告されて以来、2023年（令和5年）10月31日現在まで、累計患者数930名（うち死亡例103例）が報告されています\*<sup>2</sup>。当初、SFTSの推定感染地は西日本が中心でしたが、徐々に患者発生が確認される地域が東へ広がっています。また、患者発生報告のない地域に生息するマダニ類からもSFTSウイルス遺伝子が検出されたという報告もみられています。さらに最近ではSFTSを発症したイヌやネコなどの愛玩動物等からの接触感染も報告されています。

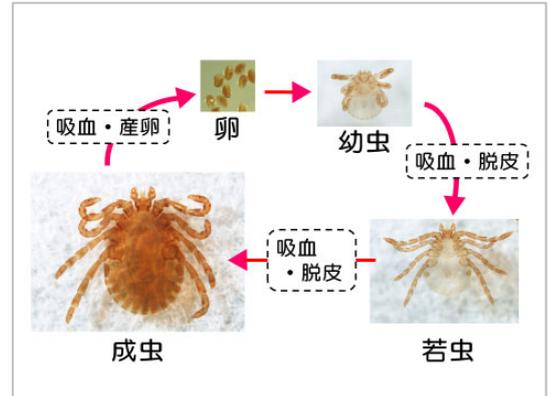


図1 マダニ類の生活史

横浜市でもマダニ類の捕獲、種の鑑別を行い、市内に生息するマダニ相を把握するとともに、ウイルス検査が行える体制を整えておくことが必要です。そのため、市内の緑地や公園において、マダニ類の生息状況調査を行い、捕獲したマダニ類のSFTSウイルス遺伝子検査を行っています。

本稿では、令和4年度に実施した調査結果について報告します。

## 2 調査方法

### (1) マダニ類の採集

マダニ類の採集は、旗ずり法（フラッキング法）により行いました。旗ずり法とは、白色フランネル布（30×45 cm）を長さ約1メートルの棒の一端に付け、地表の植生や落ち葉の上をこすり、マダニ類を採集する方法です（写真1）。調査者一人当たり約30分間調査を行いました。



写真1 旗ずり法（フラッキング法）

令和4年度は、栄区瀬上市民の森（以下円海山とする）、金沢区富岡総合公園及び戸塚区舞岡公園の3地点で調査を行いました。調査は、円海山と舞岡公園では2022年10～12月の各月1回計3回、富岡総合公園は9～12月の各月1回計4回行いました。

採集したマダニ類は、成虫については実体顕微鏡で、若虫及び幼虫については光学顕微鏡で同定しました。

## (2) SFTSウイルス遺伝子検査

採集したマダニ類の成虫及び若虫の一部について、同定、計数後にSFTSウイルス遺伝子検査\*3を行いました。

## 3 結果

### (1) マダニ類の採集

調査地点別のマダニ類の捕獲数を表に示しました。

表 調査地点別のマダニ類捕獲数

調査地点		調査 のべ人数	キチマダニ		アカコッコ マダニ		合計
栄	瀬上市民の森(円海山)	6	68	(98.6%)	1	(1.4%)	69
金沢	富岡総合公園	8	10	(100%)			10
戸塚	舞岡公園	6	11	(100%)			11
合計			89	(98.9%)	1	(1.1%)	90

令和4年度の調査では、キチマダニ *Haemaphysalis flava*、及びアカコッコマダニ *Ixodes urdus* の2種90個体のマダニ類が採集されました。調査地点別では、円海山が69個体(76.7%)、富岡総合公園が10個体(11.1%)、舞岡公園が11個体(12.2%)でした。

円海山では、10、11、12月に調査を行い、キチマダニ及びアカコッコマダニの2種が採集されました。キチマダニが98.6%を占めました。

円海山におけるキチマダニのステージ別捕獲状況について、3回の調査結果を図2に示しました。

成虫はいずれの回も捕獲されましたが、捕獲数はそれぞれ1個体、1個体、4個体と少数でした。

若虫はいずれの回も採集され、特に12月には多くの個体が確認されました。また幼虫は10月のみに捕獲され、2個体と少数でした。

富岡総合公園では、10月と12月にキチマダニの成虫が1個体ずつ、若虫は10～12月の各月にそれぞれ5、2、1個体が捕獲されました。9月の調査ではマダニ類は捕獲されませんでした。

舞岡公園では10～12月のいずれの月も若虫がそれぞれ2、7、2個体捕獲されました。

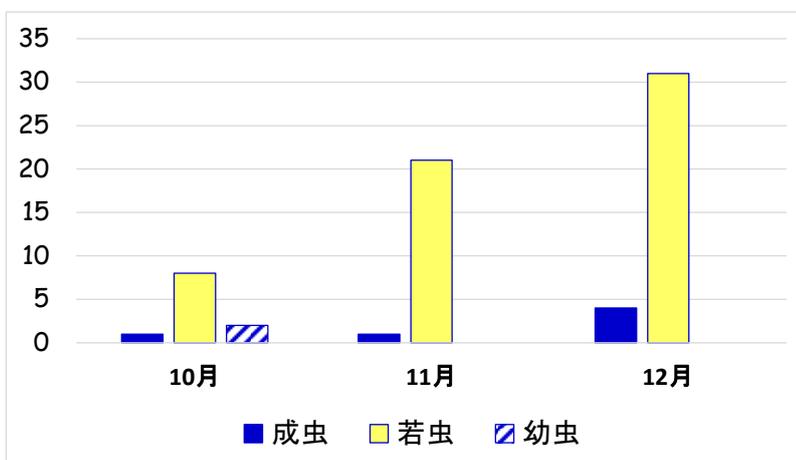


図2 円海山におけるキチマダニのステージ別捕獲状況

## (2) SFTSウイルス遺伝子検査

捕獲されたマダニ類の成虫及び若虫の一部について、SFTSウイルス遺伝子検査<sup>\*3</sup>を行いました。

円海山については、キチマダニ成虫6個体、若虫14個体及びアカコッコマダニ若虫1個体の検査を行いました。富岡総合公園については、キチマダニ成虫2個体、若虫8個体、舞岡公園についてはキチマダニ若虫8個体の検査を行いました。

いずれの検体からもSFTSウイルス遺伝子は検出されませんでした。



写真2 キチマダニ成虫

今後も市内におけるマダニ類の調査を実施し、生息状況やウイルス保有の有無について監視を継続していきます。

\*1: SFTSは、2018年の国際ウイルス分類委員会(ICVT)の新規分類で、フェニウイウイルス科(Family Phenuiviridae)バンヤンウイルス属(Genus Banyangvirus)に分類されるフアイヤンシヤン・バンヤンウイルス(Huaiyangshan banyangvirus)に科名、属名、ウイルス名が変更された。ただし、本稿では、広く一般に用いられている病名およびウイルス名である、SFTS及びSFTSウイルスを用いた。

\*2: 遡り調査の結果判明した2005年(平成17年)からの患者4人は、感染症発生動向調査で届出が求められる以前に診断されたため含まれていない。

\*3: 国立感染症研究所獣医科学部SOP「マダニからのSFTSウイルス検出マニュアル(ver3.1)」による。

【 微生物検査研究課 医動物担当 】

# 横浜市内の蚊成虫生息状況調査結果（令和5年5月～10月）

当所では、横浜市蚊媒介感染症サーベイランス事業の一環として市内公園において蚊成虫生息状況調査を行っています。蚊媒介感染症は、デング熱、ジカウイルス感染症、チクングニア熱、ウエストナイル熱、日本脳炎、マラリアなどがあり、それぞれ主要媒介蚊が異なります(表1)。そのため、感染症発生時対策として、平常時から地域特有の蚊成虫生息状況を把握しておく必要があります。

令和5年の蚊成虫捕獲調査は、市内の蚊種類相の把握を目的としたライトトラップ法と、ヤブカ属の捕獲を目的とした人<sup>ひと</sup>囀法による調査を行いました。ライトトラップ法は、ドライアイス<sup>ひとおとり</sup>を誘引剤として用いた電池式ライトトラップ(CDC型:写真1)をリスク地点5公園、モニタリング地点17公園の合計22公園に設置しました。また、捕虫網を用いた人囀法は、リスク地点の山下公園(3定点)で行いました(図1、表2)。調査は、各区福祉保健センター生活衛生課、(公社)神奈川県ペストコントロール協会、衛生研究所が行いました。

捕獲された蚊は調査場所ごとに種類を同定し、雌成虫については、フラビウイルス属(デングウイルス、ジカウイルス、ウエストナイルウイルス、日本脳炎ウイルス)及びチクングニアウイルスの遺伝子検査を実施しました。ここでは、これらの調査結果について報告します。

表1 主な蚊媒介感染症

疾患名	国内生息の主な媒介蚊	主な感染環
デング熱		ヒト→蚊→ヒト
ジカウイルス感染症	ヒトスジシマカ	ヒト→蚊→ヒト
チクングニア熱		ヒト→蚊→ヒト
ウエストナイル熱	アカイエカ群	トリ→蚊→ヒト
日本脳炎	コガタアカイエカ	ブタ→蚊→ヒト
マラリア	ハマダラカ属	ヒト→蚊→ヒト



図1 蚊成虫捕獲調査地点

表2 蚊成虫捕獲調査地点

区	調査地点	区	調査地点	区	調査地点	
鶴見	大黒中央公園(A) ●	南	蒔田の森公園(I) ●	青葉	桜台公園(Q) ●	
神奈川	三ツ沢公園(B) ●	港南	久良岐公園(J) ●	都筑	都筑中央公園(R) ●	
西	掃部山公園(C) ●	保土ヶ谷	陣ヶ下溪谷公園(K) ●	戸塚	舞岡公園(S) ●	
	臨港パーク(D) ◆		旭	こども自然公園(L) ●	栄	本郷ふじやま公園(T) ●
中	山下公園(E) ◆*1	磯子	坪呑公園(M) ●	泉	泉中央公園(U) ●	
	横浜公園(F) ◆		金沢	海の公園(N) ●	瀬谷	二ツ橋南公園(V) ●
	港の見える丘公園(G) ◆		港北	新横浜駅前公園(O) ◆		
	シンボルタワー(H) ●	緑	北八朔公園(P) ●			

●:モニタリング地点(各10回)  
◆:リスク地点(各12回)

\*1:ライトトラップ法と人囀法を実施

## 〈ライトトラップ法による蚊成虫捕獲調査〉

ライトトラップ法による蚊成虫捕獲調査をリスク地点5公園（各12回）、モニタリング地点17公園（各10回）の合計22公園で延べ230回行い、結果を表3に示しました。

捕獲された蚊成虫の雌雄合計は、7属12種9,511個体でした。最も多く捕獲された種類は、ヒトスジシマカ7,034個体(74.0%)でした。次いで、アカイエカ群が1,685個体(17.7%)、ヤマトヤブカが256個体(2.7%)、カラツイエカが175個体(1.8%)捕獲されました。

表3 ライトトラップ法による蚊の種類と総捕獲数(22公園:延べ230回<sup>\*2</sup>)

属	種	捕獲数			
		雌	雄	合計	(%)
イエカ属	アカイエカ群 <sup>*3</sup>	1,648	37	1,685	(17.7)
	コガタアカイエカ	58	0	58	(0.6)
	カラツイエカ	175	0	175	(1.8)
	ミナミハマダライエカ	2	0	2	
	クシヒゲカ亜属	11	2	13	
カクイカ属	トラフカクイカ	14	8	22	
ヤブカ属	ヒトスジシマカ	6,110	924	7,034	(74.0)
	ヤマトヤブカ	246	10	256	(2.7)
クロヤブカ属	オオクロヤブカ	106	0	106	(1.1)
ナガハシカ属	キンパラナガハシカ	75	51	126	(1.3)
ナガスネカ属	ハマダラナガスネカ	17	0	17	
チビカ属	フタクロホシチビカ	4	4	8	
破損(同定不能)		9	0	9	
合計		8,475	1,036	9,511	



写真1 CDC型ライトトラップ



ヒトスジシマカ 雌成虫

\*2:リスク地点(5公園)は各12回、モニタリング地点(17公園)は各10回調査を行った。

\*3:アカイエカ群には、アカイエカ、チカイエカ、ネツタイエカの3亜種が含まれる。3亜種は実体顕微鏡下での外部形態による同定が容易ではないため、多くの調査で、アカイエカ群として扱われている。

調査地点別の蚊捕獲数を図2に示しました。調査期間中最も多く捕獲されたのは、北八朔公園(緑区)の1,702個体で、次いで、海の公園(金沢区)が1,070個体、桜台公園(青葉区)が746個体でした。種類別に見ると、ヒトスジシマカは、北八朔公園で1,521個体と最も多く捕獲され、次いで海の公園が934個体でした。アカイエカ群は、シンボルタワー(中区)で243個体と最も多く捕獲され、次いで臨港パークが203個体でした。コガタアカイエカは、シンボルタワーで35個体と最も多く捕獲されました。

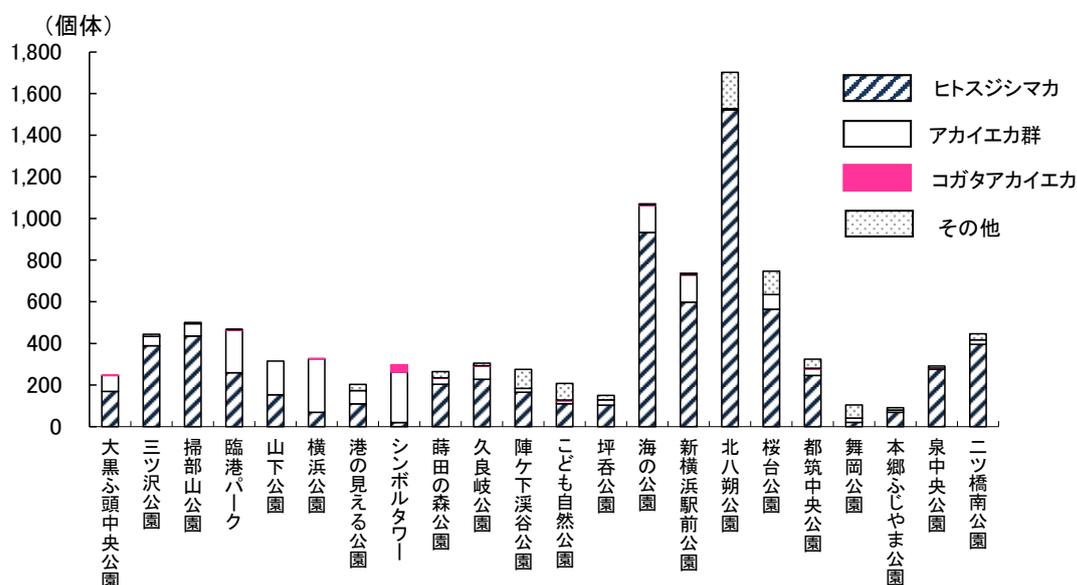


図2 調査地点別の蚊捕獲数

ひとひとり  
〈人囿法によるヒトスジシマカ成虫捕獲調査:山下公園〉

山下公園、3定点において(図3)、人囿法(写真2)による蚊成虫捕獲調査を各12回(延べ36回)行いました。捕獲されたヒトスジシマカは、雌成虫が118個体、雄成虫が73個体、合計191個体でした。



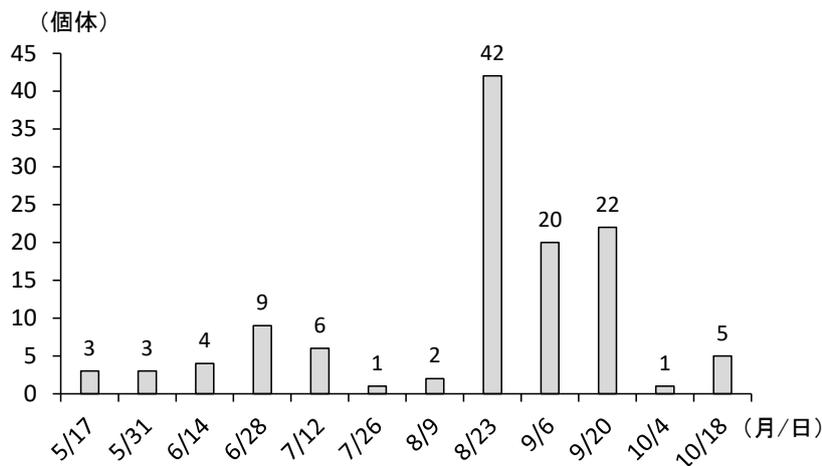
【山下公園】①発電設備横 ②中央広場付近の植え込み ③世界の広場端の緑地

ひとひとり  
図3 人囿法の調査定点

ひとひとり  
〈人囿法によるヒトスジシマカ雌成虫の消長:山下公園〉

ひとひとり  
人囿法によって捕獲されたヒトスジシマカ雌成虫の消長(3定点の合計捕獲数)を図4に示しました。

ヒトスジシマカ雌成虫は、調査期間を通じて捕獲されました。初回調査の5/17に3個体捕獲され、8/9までは9個体以下と少ない捕獲数でした。8/23には42個体と増加し、9/6は20個体、9/20は22個体とやや多く、その後は減少し、調査最終回の10/15は5個体でした。



ひとひとり  
図4 人囿法によるヒトスジシマカ雌成虫の消長(山下公園)



ひとひとり  
写真2 人囿法

〈ウイルス検査〉

ひとひとり  
ライトトラップ法によって捕獲された雌成虫8,475個体、人囿法によって捕獲されたヒトスジシマカ雌成虫118個体について、フラビウイルス属(デングウイルス、ジカウイルス、ウエストナイルウイルス、日本脳炎ウイルス)及びチクングニアウイルスの遺伝子検査を実施し、全て不検出でした。

なお、詳細は、衛生研究所ウェブページに掲載されています。

横浜市衛生研究所ウェブページ:感染症発生状況資料集>病原体情報

<https://www.city.yokohama.lg.jp/kurashi/kenko-iryo/eiken/kansen-center/byogentai/inf-c-kabaikai.html>

# 魚介類中のPCB及びメチル水銀検査結果（令和5年度）

PCB、水銀は生態系の食物連鎖を通じて魚介類に蓄積され、これを食することによる健康への影響が懸念されています。厚生労働省ではPCB、水銀について暫定的規制値を設定しています。当所では横浜市内に流通する魚介類についてPCB、メチル水銀の検査を行っています。

## 1 PCB検査

令和5年6月及び10月に中央卸売市場本場で収去した魚介類10種10検体について、PCBの検査を行いました。その結果、表1に示すとおり全ての検体で不検出でした。

表1 PCBの検査結果

食品の種類	検体数	検出件数	結果	暫定的規制値	
遠洋沖合魚介類	ババガレイ	1	0	不検出	0.5ppm
	ヒラメ	1	0	不検出	
	マイワシ	1	0	不検出	
	マコガレイ	1	0	不検出	
内海内湾魚介類	イサキ	1	0	不検出	3ppm
	カンパチ	1	0	不検出	
	マアジ	1	0	不検出	
	マダイ	1	0	不検出	
	ヤマトカマス	1	0	不検出	
	ヤリイカ	1	0	不検出	
	計	10	0		

(検出限界:0.01ppm)

## 2 メチル水銀検査

令和5年6月に中央卸売市場本場食品衛生検査所で行った魚類の総水銀検査で、マダイ1件から暫定的規制値(0.4ppm)を超えた総水銀が検出されました。衛生研究所においてメチル水銀の検査を行った結果、表2に示すとおりマダイからメチル水銀が水銀として0.51ppm検出されました。

表2 メチル水銀の検査結果

食品の種類	検体数	検出件数	結果	暫定的規制値
マダイ	1	1	0.51ppm	0.3ppm

(検出限界 : 0.08ppm)

### 【魚介類の水銀の検査について】

魚介類の水銀の暫定的規制値は「総水銀」と「メチル水銀」の2つの項目から定められています。検査は、はじめに総水銀の検査を行います。その結果が0.4ppmを超える場合は、さらにメチル水銀の検査を行い、その結果が水銀として0.3ppmを超えた場合に暫定的規制値を超過した魚介類と判定します。

【 理化学検査研究課 微量汚染物担当 】

## 農産物の残留農薬検査結果（令和5年10月）

食品中に残留する農薬等が、人の健康に害を及ぼすことのないよう、厚生労働省は農薬等について残留基準を設定しています。当所では、横浜市内に流通する農産物に残留する農薬の検査を行っています。

今回は、令和5年10月に各区福祉保健センター及び医療局食品専門監視班が収去した市内産農産物及び冷凍食品の検査結果を報告します。

市内産農産物については、なす6検体、こまつな5検体、玄米4検体、さつまいも及びばれいしょ各3検体、とうがん及びピーマン各2検体、かぼちゃ、キャベツ、きゅうり、さといも及び水菜各1検体の計30検体、冷凍食品については、かぼちゃ2検体、さといも、ブロッコリー及びほうれんそう各1検体の計5検体、合計で35検体の検査を行いました。

検査の結果を表1に示しました。ピーマン2検体、かぼちゃ(冷凍)、キャベツ、こまつな、さといも、ばれいしょ及びほうれんそう各1検体から延べ13項目の農薬が検出されましたが、基準値を超えたものはありませんでした。

検査項目及び検出限界については表2に示しました。

表1 市内産農産物及び冷凍食品の残留農薬検査結果 （令和5年10月）

農産物	検査 検体数	農薬検出 検体数	検出農薬名	検出値 (ppm)	基準値 (ppm)
<b>市内産農産物</b>					
かぼちゃ	1	0			
キャベツ	1	1	クロルフェナピル	0.33	1
きゅうり	1	0			
玄米	4	0			
こまつな	5	1	ジノテフラン	0.05	10
さつまいも	3	0			
さといも	1	1	イミダクロプリド	0.03	0.4
とうがん	2	0			
なす	6	0			
ばれいしょ	3	1	{ クロチアニジン	0.04	0.3
			{ チアメトキサム	0.06	0.3
ピーマン	2	1	{ クロチアニジン	0.26	3
			{ クロルフェナピル	0.18	1
		1	ルフェヌロン	0.03	1
水菜	1	0			
<b>冷凍食品</b>					
かぼちゃ	2	1	{ アルドリン及びディルドリン	0.008	0.1
			{ エンドリン	0.01	0.05
さといも	1	0			
ブロッコリー	1	0			
ほうれんそう	1	1	{ アゾキシストロビン	0.08	30
			{ イミダクロプリド	0.12	15
			{ シペルメリン	0.27	5

注) 中括弧 ( ) はそれぞれ同一検体から検出されたもの

表 2 農薬の検査項目及び検出限界

農薬名	検出 限界 (ppm)	農産物					農薬名	検出 限界 (ppm)	農産物				
		A	B	C	D	E			A	B	C	D	E
BHC ( $\alpha, \beta, \gamma$ 及び $\delta$ の和)	0.005	○	○	—	○	—	テブコナゾール	0.01	○	○	○	○	○
DDT (DDE,DDD,DDTの和*)	0.005	○	○	○	○	○	テブフェノジド	0.01	○	○	○	○	○
EPN	0.01	○	○	○	○	○	テブフェンピラド	0.01	○	○	○	○	○
アクリナトリン	0.01	○	○	○	○	○	テフルトリン	0.01	○	○	○	○	○
アセタミプリド	0.01	○	○	○	○	○	トリアゾホス	0.01	○	○	○	○	○
アセフェート	0.01	○	○	○	○	○	トリチコナゾール	0.01	○	○	○	○	○
アゾキシストロビン	0.01	○	○	○	○	○	トリフルラリン	0.01	○	○	—	○	—
アラクロール	0.01	○	○	○	○	○	トリフロキシストロビン	0.01	○	○	○	○	○
アルドリン及びディルドリン	0.005	—	○	—	○	○	トルクロホスメチル	0.01	○	○	○	○	○
イソキサチオン	0.01	—	—	○	○	○	トルフェンピラド	0.01	—	○	○	○	○
イミダクロプリド	0.01	○	○	○	○	○	ノバルロン	0.01	○	○	○	○	○
インドキサカルブ	0.01	○	○	○	○	○	パラチオン	0.01	○	○	○	○	○
エトキサゾール	0.01	○	○	○	○	○	パラチオンメチル	0.01	○	○	○	○	○
エトフェンプロックス	0.01	○	○	○	○	○	ピフェントリン	0.01	○	○	○	○	○
エポキシコナゾール	0.01	○	○	○	○	○	ピリダベン	0.01	—	○	○	○	○
エンドスルファン( $\alpha$ 及び $\beta$ の和)	0.005	○	○	○	○	○	ピリプロキシフェン	0.01	○	○	○	○	○
エンドリン	0.005	○	○	—	—	—	ピリミカーブ	0.01	○	○	○	○	○
オキサミル	0.01	○	○	○	○	○	ピリミノバックメチル	0.01	○	○	○	○	○
カルバリル	0.01	○	○	○	○	○	ピリミホスメチル	0.01	○	○	○	○	○
カルプロバミド	0.01	○	○	○	○	○	ファモキサドン	0.01	—	○	○	○	○
クミルロン	0.01	○	○	○	○	○	フィプロニル	0.002	—	○	○	○	○
クレソキシムメチル	0.01	○	○	○	○	○	フェナリモル	0.01	○	○	○	○	○
クロチアニジン	0.01	○	○	○	○	○	フェントロチオン	0.01	○	○	○	○	○
クロマフェノジド	0.01	○	○	○	○	○	フェノブカルブ	0.01	○	○	○	○	○
クロルピリホス	0.01	○	○	○	○	○	フェンクロルホス	0.01	○	○	○	○	○
クロルピリホスメチル	0.01	○	○	○	○	○	フェンスルホチオン	0.01	○	○	○	○	○
クロルフェナピル	0.01	○	○	○	○	○	フェントエート	0.01	—	○	○	○	○
クロルプロファミ	0.01	○	○	○	○	○	フェンバレレート	0.01	○	○	○	○	○
クロロクロン	0.01	○	○	○	○	○	フェンピロキシメート	0.01	○	○	○	○	○
シアゾファミド	0.01	○	○	○	○	○	フェンブコナゾール	0.01	○	○	○	○	○
シアノフェンホス	0.01	○	○	○	○	○	フェンプロパトリン	0.01	○	○	○	○	○
シアノホス	0.01	○	○	○	○	○	フサライド	0.01	—	○	○	○	○
ジエトフェンカルブ	0.01	○	○	○	○	○	ブタフェナシル	0.01	○	○	○	○	○
ジコホール	0.01	○	○	○	○	○	ブプロフェジン	0.01	○	○	○	○	○
ジノテフラン	0.01	○	○	○	○	○	フルジオキサニル	0.01	○	○	○	○	○
シハロトリン	0.01	—	○	○	○	○	フルシトリネート	0.01	○	○	○	○	○
ジフェノコナゾール	0.01	○	○	○	○	○	フルトラニル	0.01	○	○	○	○	○
シフルトリン	0.01	○	○	○	○	○	フルバリネート	0.01	○	○	○	○	○
シフルフェナミド	0.01	○	○	○	○	○	フルフェノクスロン	0.01	○	○	○	○	○
シプロコナゾール	0.01	○	○	○	○	○	フルリドン	0.01	○	○	○	○	○
シペルメトリン	0.01	○	○	○	○	○	プロシミドン	0.01	○	○	○	○	○
ジメトエート	0.01	○	○	○	○	○	プロチオホス	0.01	○	○	○	○	○
ジメトモルフ	0.01	○	○	○	○	○	プロバホス	0.01	○	○	○	○	○
シラフルオフェン	0.01	○	○	○	○	○	プロピコナゾール	0.01	○	○	○	○	○
ダイアジノン	0.01	○	○	○	○	○	プロピザミド	0.01	○	○	○	○	○
ダイムロン	0.01	○	○	○	○	○	ブロモプロピレート	0.01	○	○	○	○	○
チアクロプリド	0.01	○	○	○	○	○	ヘキサコナゾール	0.01	○	○	○	○	○
チアメトキサム	0.01	○	○	○	○	○	ヘプタクロル(エポキシドを含む)	0.005	—	○	—	○	—
テトラコナゾール	0.01	○	○	○	○	○	ペルメトリン	0.01	—	○	○	○	○

表 2(続き) 農薬の検査項目及び検出限界

農薬名	検出 限界 (ppm)	農産物					農薬名	検出 限界 (ppm)	農産物				
		A	B	C	D	E			A	B	C	D	E
ペンコナゾール	0.01	○	○	○	○	○	メタラキシル及びメフェノキサム	0.01	○	○	○	○	○
ペンシクロン	0.01	○	○	○	○	○	メチダチオン	0.01	○	○	○	○	○
ベンゾフェナップ	0.01	○	○	○	○	○	メキシフェノジド	0.01	○	○	○	○	○
ベンダイオカルブ	0.01	○	○	○	○	○	メトラクロール	0.01	○	○	○	○	○
ボスカリド	0.01	○	○	○	○	○	リニュロン	0.01	○	○	○	○	○
ホスチアゼート	0.01	○	○	○	○	○	リンデン( $\gamma$ -BHC)	0.005	○	○	○	○	○
マラチオン	0.01	○	○	○	○	○	ルフェヌロン	0.01	○	○	○	○	○
ミクロブタニル	0.01	○	○	○	○	○	レナシル	0.01	○	○	○	○	○
メタミドホス	0.01	○	-	○	○	○							

農産物の種類 A:玄米 B:かぼちゃ、こまつな、ピーマン、ブロッコリー、ほうれんそう C:キャベツ、とうがん、なす、水菜 D:さつまいも、さといも、ばれいしょ E:きゅうり

○:実施、-:実施せず

\*DDTは $p,p'$ -DDE、 $p,p'$ -DDD、 $o,p'$ -DDT及び $p,p'$ -DDTの和

### 【農薬解説】

今回は、複数の農産物から検出された農薬を紹介します。

#### イミダクロプリド

ネオニコチノイド系の殺虫剤で、高い殺虫活性、浸透移行性、残効性があります。カメムシ目、コウチュウ目、アザミウマ目に殺虫効力があり、有機リン系、カーバメイト系殺虫剤に抵抗性を示す害虫及びミナキイロアザミウマやタバコジラミのような難防除害虫にも効果があります。

#### クロチアニジン

ネオニコチノイド系の殺虫剤で、カメムシ目、チョウ目、ハエ目、アザミウマ目害虫等幅広い害虫に低薬量で効果を示します。特に吸汁性害虫に高い殺虫効力があり、既存の薬剤に抵抗性を示すアブラムシ等や難防除害虫のマメハモグリバエに対しても効果があります。また、散布、育苗箱処理、植穴処理、株元処理、種子処理等多様な処理方法が可能です。

#### クロルフェナピル

ピロール環を持つ殺虫・殺ダニ剤で、野菜・茶・果樹等のチョウ目、アザミウマ目、ダニ目害虫に対して殺虫効果があります。既存の殺虫剤との交差抵抗性がなく、難防除害虫にも優れた効果があります。

#### ※参考文献

・社団法人日本植物防疫協会、農薬ハンドブック2021年版

【 理化学検査研究課 微量汚染物担当 】

# 衛生研究所ウェブページ情報（令和5年12月）

---

横浜市衛生研究所ウェブページは、平成10年3月に所独自のウェブサイトとして開設されました。現在は、本市ウェブサイトと統合され、感染症情報、保健情報、食品衛生情報、生活環境衛生情報、薬事情報を提供しています。今回は、当ウェブページにおける令和5年12月の追加・更新記事について報告します。

## 1 追加・更新記事

令和5年12月に追加・更新した主な記事は、10件でした。

---

掲載月日	内容
12月4日	感染症に気をつけよう(12月号)
12月7日	横浜市感染症臨時情報(咽頭結膜熱 第48週) 横浜市インフルエンザ流行情報 12号
12月14日	横浜市インフルエンザ流行情報 13号 横浜市感染症臨時情報(咽頭結膜熱 第49週)
12月21日	横浜市インフルエンザ流行情報 14号 横浜市感染症臨時情報(咽頭結膜熱 第50週)
12月27日	感染症に気をつけよう(1月号)
12月28日	横浜市インフルエンザ流行情報 15号 横浜市感染症臨時情報(咽頭結膜熱 第51週)

---

## 2 記事紹介

感染症に気をつけよう

<https://www.city.yokohama.lg.jp/kurashi/kenko-iryoo/eiken/kansen-center/shimin/kiwotukekyou.html>

横浜市インフルエンザ流行情報

<https://www.city.yokohama.lg.jp/kurashi/kenko-iryoo/eiken/kansen-center/rinji/influenza-rinji-2023.html>

横浜市感染症臨時情報(咽頭結膜熱)

<https://www.city.yokohama.lg.jp/kurashi/kenko-iryoo/eiken/kansen-center/rinji/pcf.html>

【 感染症・疫学情報課 】

# 横浜市感染症発生動向調査報告（令和5年12月）

## 《今月のトピックス》

- 感染性胃腸炎が多く発生し、集団感染の報告も増加しています。
- 咽頭結膜熱、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は、例年の同時期と比較しかなり多く発生しています。
- インフルエンザは流行注意報が発令されています。予防接種、手洗いや咳エチケットなどの感染対策を心がけましょう。

### ◇ 全数把握の対象

<11月期に報告された全数把握疾患>

腸管出血性大腸菌感染症	2件	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	4件
腸チフス	1件	急性脳炎	1件
パラチフス	1件	侵襲性インフルエンザ菌感染症	1件
E型肝炎	2件	侵襲性肺炎球菌感染症	6件
つつが虫病	1件	水痘(入院例に限る)	3件
デング熱	1件	梅毒	18件
レジオネラ症	4件	播種性クリプトコックス症	1件

- 腸管出血性大腸菌感染症**:20歳代～30歳代で、血清群O157が2件です。経口感染と推定される報告が1件、動物・蚊・昆虫等からの感染と推定される報告が1件ありました。
- 腸チフス**:20歳代で、感染経路等不明です。
- パラチフス**:20歳代で、感染経路等不明です。
- E型肝炎**:50歳代～60歳代で、いずれも感染経路等不明です。
- つつが虫病**:80歳代で、動物・蚊・昆虫等からの感染と推定される報告が1件ありました。
- デング熱**:20歳代で、蚊からの感染(海外)と推定されています。
- レジオネラ症**:60歳代～80歳代で、水系感染と推定される報告が2件、感染経路等不明の報告が2件です。
- カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症**:60歳代～80歳代で、いずれも感染経路等不明です。
- 急性脳炎**:10歳未満で、病原体不明、感染経路等不明です。
- 侵襲性インフルエンザ菌感染症**:80歳代(ワクチン接種歴無)、感染経路等不明です。
- 侵襲性肺炎球菌感染症**:10歳未満～90歳代(ワクチン接種歴4回1件、無1件、不明4件)で、飛沫・飛沫核感染と推定される報告が5件、感染経路等不明の報告が1件ありました。
- 水痘(入院例に限る)**:20歳代～80歳代(ワクチン接種歴1回1件、不明2件)で、いずれも感染経路等不明です。
- 梅毒**:10歳代～70歳代で、早期顕症梅毒Ⅰ期12件、早期顕症梅毒Ⅱ期5件、晩期顕症梅毒1件です。性的接触による感染と推定される報告が16件(異性間13件、詳細不明3件)、感染経路等不明の報告が2件ありました。
- 播種性クリプトコックス症**:80歳代で、感染経路等不明です。

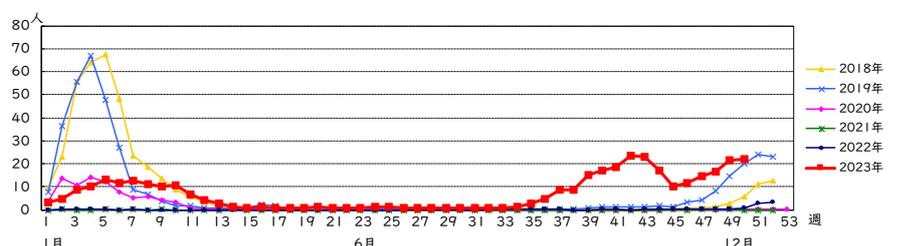
報告週対応表

第48週	11月27日～12月 3日
第49週	12月 4日～12月10日
第50週	12月11日～12月17日

### ◇ 定点把握の対象

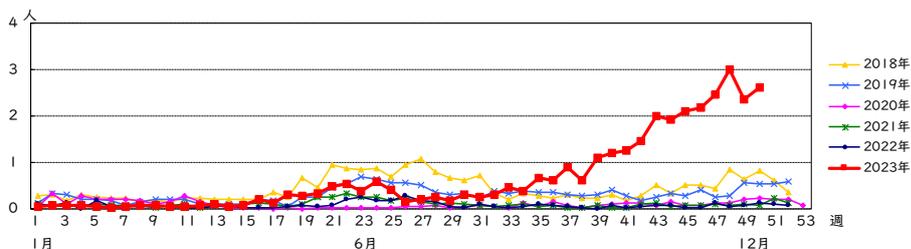
#### 1 インフルエンザ

第34週以降増加が続き、第39週14.86で流行注意報発令基準値(定点あたり10.00)を上回りました。第50週は22.05です。詳細は、横浜市インフルエンザ流行情報14号をご覧ください。



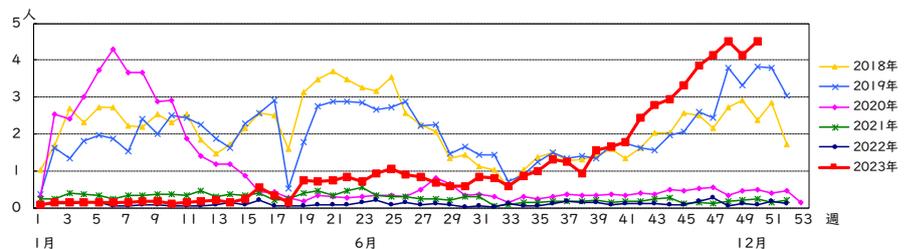
## 2 咽頭結膜熱

第39週以降増加が続き、第48週(3.00)に流行警報発令基準値(定点あたり3.00)となりました。第50週は2.60です。詳細は、咽頭結膜熱流行情報3号をご参照ください。



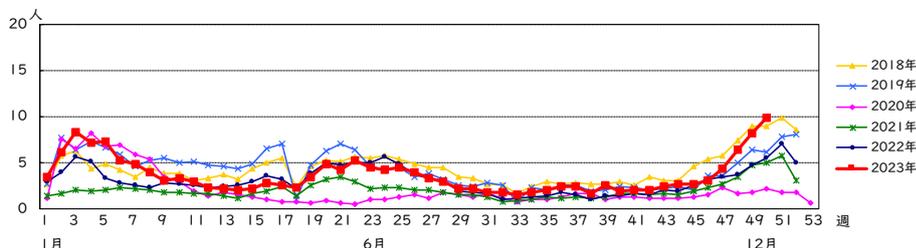
## 3 A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

第39週以降増加傾向が続き、第50週は4.50です。過去5年間の同時期と比較し多くなっています。



## 4 感染性胃腸炎

第41週以降増加傾向が続き、第47週以降の増加が顕著です。第50週は9.77です。



## 5 新型コロナウイルス感染症

2023年5月8日(第19週)より定点報告となりました。第36週18.38をピークに減少していましたが、第47週以降再び増加に転じています。第50週は2.42です。



## 6 性感染症(11月)

性器クラミジア感染症	男性:27件	女性:24件	性器ヘルペスウイルス感染症	男性:4件	女性:18件
尖圭コンジローマ	男性:9件	女性:3件	淋菌感染症	男性:17件	女性:4件

## 7 基幹定点週報

	第48週	第49週	第50週
細菌性髄膜炎	0.00	0.00	0.00
無菌性髄膜炎	<b>0.25</b>	0.00	<b>0.25</b>
マイコプラズマ肺炎	<b>1.00</b>	0.00	0.00
クラミジア肺炎(オウム病を除く)	0.00	0.00	0.00
感染性胃腸炎(ロタウイルスに限る)	0.00	0.00	0.00

## 8 基幹定点月報(11月)

メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症	2件	ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	0件
薬剤耐性緑膿菌感染症	0件	-	-

【 感染症・疫学情報課 】

## ◇ 病原体定点からの情報

市内の病原体定点は、小児科定点:8か所、インフルエンザ(内科)定点:4か所、眼科定点:1か所、基幹(病院)定点:4か所の計17か所を設定しています。

検体採取は、小児科定点とインフルエンザ定点では定期的に行っており、小児科定点は8か所を2グループに分けて毎週1グループで実施しています。

眼科と基幹定点では、検体採取は対象疾患の患者から検体を採取できたときにのみ行っています。

### 〈ウイルス検査〉

12月期(2023年第48週～第51週)に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点34件、内科定点9件、基幹定点6件及び定点外医療機関1件でした。

ウイルス分離30株及び各種ウイルス遺伝子6件が検出されています。

表 感染症発生動向調査におけるウイルス検査結果 (2023年第48週～第51週)

主な臨床症状等 分離・検出ウイルス	上 気 道 炎	下 気 道 炎	イン フル エン ザ	咽 頭 結 膜 炎
アデノウイルス	3			
アデノウイルス3型	2	1		1
インフルエンザウイルスAH1pdm		1	7	
インフルエンザウイルスAH3	1		17	
ヒトコロナウイルスOC43		2		
ライノウイルス		1		
合計	3	2	24	1
	3	3	-	-

上段:ウイルス分離数 下段:遺伝子検出数

【 微生物検査研究課 ウイルス担当 】

## 〈細菌検査〉

12月期(2023年第48週～第50週)の「菌株同定」の検査依頼は、基幹定点からカルバペネム耐性腸内細菌目細菌1件、侵襲性肺炎球菌2件、クリプトコッカス属1件、サルモネラ属菌1件でした。非定点からの依頼はありませんでした。保健所からの依頼は、腸管出血性大腸菌4件、パラチフスA菌1件、カルバペネム耐性腸内細菌目細菌4件、侵襲性肺炎球菌2件、レジオネラ属菌1件、侵襲性インフルエンザ菌1件でした。

「分離同定」の検査依頼は、保健所からレジオネラ属菌1件でした。

「小児サーベイランス」の検査依頼は咽頭炎等5件でした。

表 感染症発生動向調査における病原体調査（2023年第48週～第50週）

菌株同定		項目	検体数	血清型等		
医療機関	基幹定点	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌	1	<i>Klebsiella pneumoniae</i> (1)		
		侵襲性肺炎球菌	2	<i>Streptococcus pneumoniae</i> 22F (1)、 <i>Streptococcus pneumoniae</i> 28F (1)		
		クリプトコッカス属	1	<i>Cryptococcus neoformans</i> (1)		
		サルモネラ属菌	1	<i>Salmonella</i> Chester (1)		
保健所		腸管出血性大腸菌	4	O157 : H7 VT2 (2)、O157 : H7 VT1 VT2 (1)、 O115 : H10 VT1 (1)		
		パラチフスA菌	1	<i>Salmonella</i> ParatyphiA (1)		
		カルバペネム耐性腸内細菌目細菌	4	<i>Enterobacter cloacae</i> complex (1)、 <i>Klebsiella pneumoniae</i> (1)、 <i>Klebsiella oxytoca</i> (1)、 <i>Escherichia coli</i> (1)		
		侵襲性肺炎球菌	2	<i>Streptococcus pneumoniae</i> 15A (2)		
		レジオネラ属菌	1	<i>Legionella pneumophila</i> SG1 (1)		
		侵襲性インフルエンザ菌	1	<i>Haemophilus influenzae</i> (1)		
		分離同定	材料	項目	検体数	同定、血清型等
		保健所	喀痰	レジオネラ属菌	1	培養陰性 (1)
小児サーベイランス	材料	臨床症状	検体数	同定、血清型等		
小児科定点	咽頭ぬぐい液	咽頭炎、咽頭痛	5	A群溶血性レンサ球菌 TUT 陽性 (3)、 A群溶血性レンサ球菌 T12 陽性 (1)、 A群溶血性レンサ球菌 陰性 (1)		

【 微生物検査研究課 細菌担当 】